

研究主題

言語事項の定着を目指した国語科学習指導の在り方

～説明文の読みの指導を通して～

主題設定の理由

今日の情報化社会においては、書物を通して得る情報や、映像や音声を通して得る情報が氾濫している。映像や音声を通して得る情報は、子どもたちにとって興味・関心をもって得やすい反面、誤った言葉の用い方までもが、知識となって得られることにもなり、日本人の言葉の乱れにつながっているという指摘もある。

「平成14年度国語に関する世論調査」(文化庁)において、「現在使われている言葉は乱れていると思うか」の問い合わせに対して、「非常に乱れていると思う」が24.4%、「ある程度乱れていると思う」が56.0%であった。両方を合わせた「乱れている(計)」は、80.4%と8割を超えていた。慣用句等の理解についても、「役不足」「確信犯」「流れに棹さす」の3つは、全世代で、「本来の意味」よりも「本来とは異なる意味」を選んだ割合の方が高くなっている。

このような問題点が指摘される中、「国語力の向上」の必要性が求められるようになった。文部科学省の確かな学力の向上に関する総合的施策の中の「特定分野において卓越した人材を育成」では、国語力向上推進事業が盛り込まれている。また、文化審議会国語分科会では小学校の国語科授業時数の大幅増が提案されるなど、国語科授業の重要性も指摘されている。

小学校学習指導要領では、改善の基本方針が、次のように示されている。「小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語の教育の立場を重視し、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てるとともに、豊かな言語感覚を養い、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成することに重点を置いて内容の改善を図る。(以下省略)」したがって、国語科においては、言語の教育の立場を重視し、我が国の言語を学ぶ教科としての重要性について認識することが必要である。さらに、正しい言葉の使い方ができる日本人を育成するための、言語の指導の充実を図ることが求められる。

平成14、15年度の宮崎県小学校基礎学力調査では、物語に比べて説明文に関する問題において、学習内容の定着が十分であるとは言えない傾向がみられる。また、「ことばに関する問題」の中で、「正しい筆順で書くことができる」「主語述語の関係を理解し、指摘できる」については、他の問い合わせに比べ、定着が十分であるとは言えない傾向がみられる。「筆順」や「主語述語の関係」の理解は、言葉に関する基礎となる力であり、国語科の基礎となる力もある。特に、「主語述語の関係」については、文章の最も基本となる関係であり、正しく話したり、正しく書いたりするための基礎となるだけではなく、文章の意味を叙述に即して正しく読むための基礎となるものである。

そこで、説明文の指導において、基礎的・基本的な内容、特に、「言語事項」の確実な定着を目指した学習指導の在り方について研究することにより、基礎的な言語に関する能力を育成することができ、本県の国語科学力の向上につながると考え、本主題を設定した。

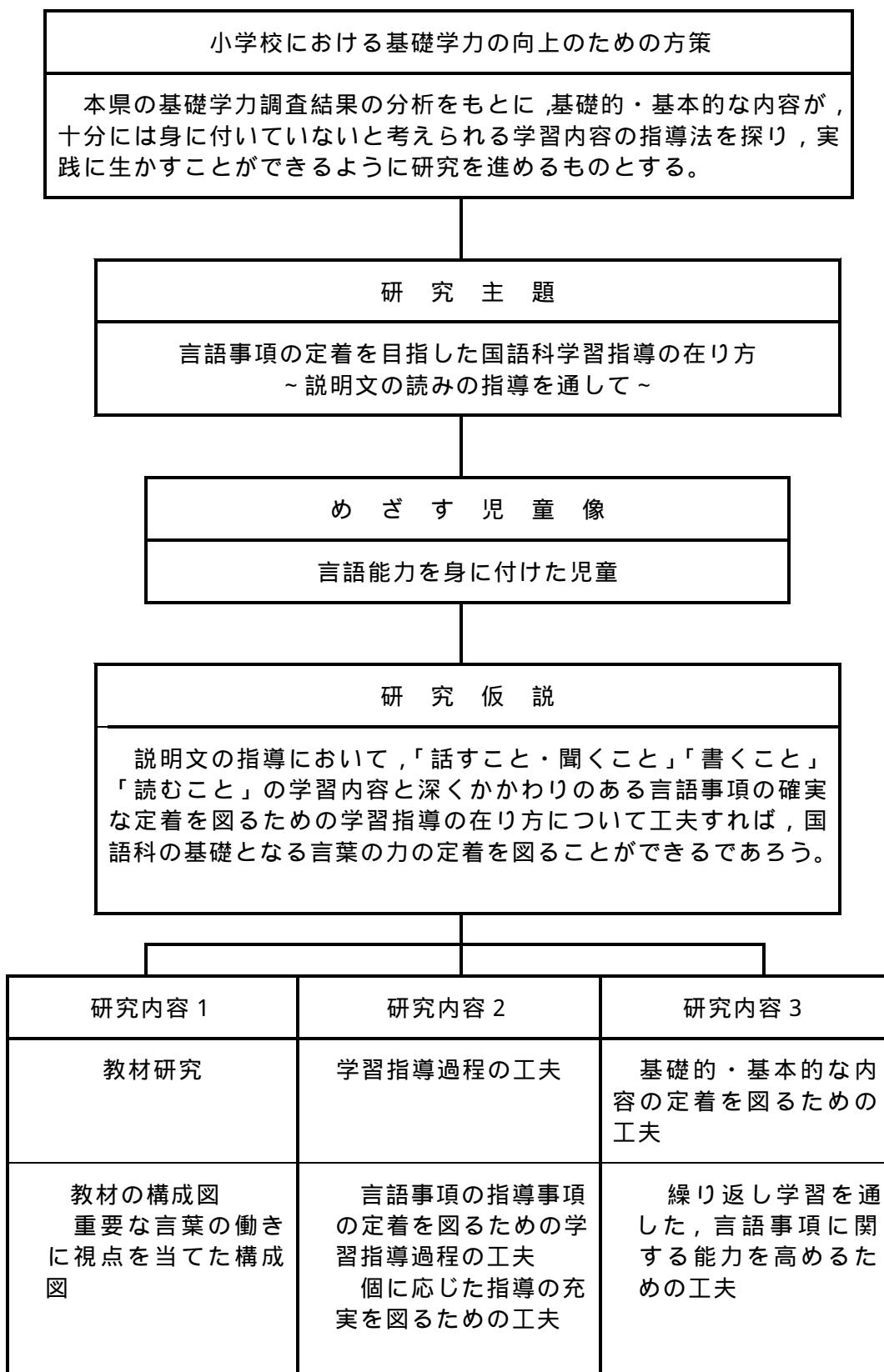
研究仮説

説明文の指導において、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の学習内容の定着と深くかかわりのある言語事項の確実な定着を図るために学習指導の在り方について工夫すれば、国語科の基礎的な言語に関する能力を育成することができるであろう。

研究経過

	平成15年度	平成16年度
月	内 容	内 容
4	・研究領域の検討	・調査研究の全体構想の確認 ・研究内容の具体的準備 ・実態把握のための調査問題の作成
5	・研究主題、研究仮説の設定 ・研究計画作成	・研究内容の具体的準備 ・実態把握のための調査及び分析 ・研究協力学校との打合せ
6	・調査、理論研究	・検証授業の実践 ・ワークシートを用いた研究実践 ・成果検証のための実態調査用紙の作成
7	・調査、理論研究	・検証授業の分析 ・ワークシートを用いた研究実践 ・成果検証のための実態調査の実施
8	・調査、理論研究	・検証授業の分析
9	・調査、理論研究	・成果、課題の整理
10	・調査、理論研究	・成果、課題の整理
11	・調査、理論研究	・研究のまとめ
12	・調査、理論研究	・研究紀要の作成準備
1	・研究のまとめ	・研究紀要の作成
2	・研究のまとめ ・中間報告書の作成	・研究紀要の作成
3	・中間報告書の完成	・研究紀要の完成 ・次年度研究の方向性検討

研究の構想



研究の実際

1 本研究についての基本的な考え方

(1) 国語科における基礎・基本の考え方

国語科における基礎・基本は、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の3領域と「言語事項」の1事項に関する指導内容すべてであると言つてよい。

国語科の目標を具現化するためには、言語能力育成の基になる言語事項と「話す力・聞く力」「書く力」「読む力」を育成する基本的内容を教師が熟知して、意図的、計画的、継続的に学習指導を展開しなければならない。

「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」3領域と「言語事項」1事項の指導内容を図1に示す。

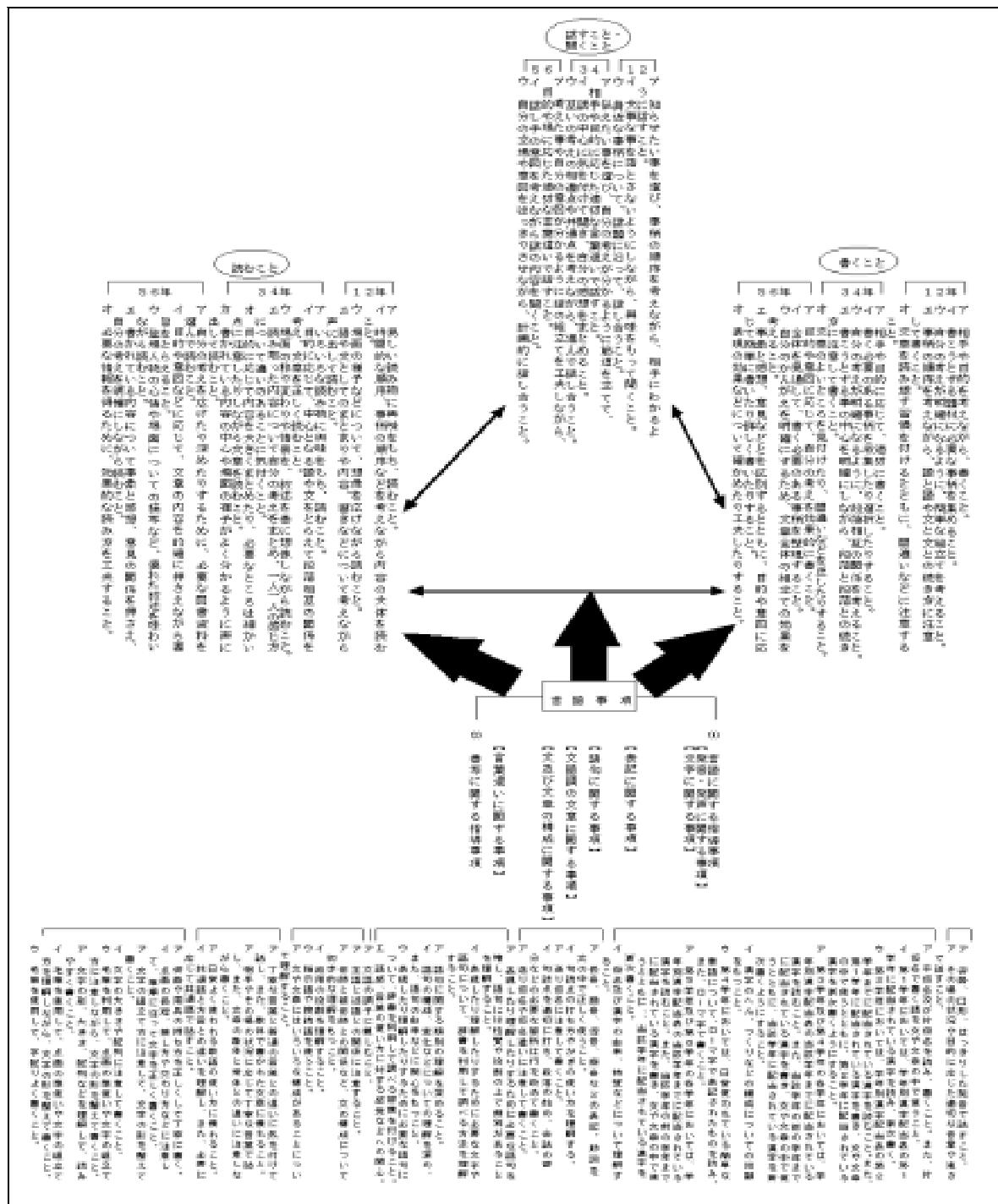


図 1 3領域1事項の指導内容一覧

(2) 基礎学力調査結果に基づいた実態分析（各領域ごとの特色 - 言語事項の指導と関連付けて）

ア 聞き取り

「事柄の順序を考えながら話すこと」に対して、「大事な事を落とさないように聞くこと」の力が十分身に付いているとは言えない。

「大事な事を落とさないように聞く」力を育成するには、メモの取り方を指導することが有効である。しかし、何が大切な言葉なのか、話し手が何を言おうとしているのかを考えながら聞くことができなければ、必要な事をメモすることも容易ではない。そこで、何が大切な言葉なのか、話し手が何を言おうとしているのかを聞き取るための基礎となる力である言語事項とのつながりを重視し、その理解ができるように配慮する必要がある。特につながりが強いと言える言語事項を以下にあげる。

言語事項(1)

(オ)文及び文章の構成に関する事項

1学年 2学年(ア)「文の中における主語と述語との関係に注意すること」

3学年 4学年(ア)「修飾と被修飾との関係など、文の構成について初步的な理解をもつこと」

(ウ)語句に関する事項

3学年 4学年(ア)「表現したり理解したりするための必要な語句を増やし、また、語句には性質や役割の上で類別があることを理解すること」

5学年 6学年(ア)「語句に関する類別の理解を深めること」

イ 物語

物語においては、「文脈をふまえて該当表現を指摘する」問い合わせについて、他に比べて、その定着が十分ではないという結果がみられる。このことから、「目的に応じて、中心となる語や文をとらえること」「場面の移り変わりや情景を、叙述を基に想像しながら読むこと」という指導内容の定着が十分であるとは言えない。

「中心となる語や文をとらえ」、「叙述を基に想像しながら読む」ための基礎となる力である、言語事項（「ア 聞き取り」であげた言語事項に同じ）とのつながりを重視し、その理解ができるように配慮する必要がある。

ウ 説明文

説明文においては、「叙述の順序を正確に読み取る」「適切な接続語を選択する」「指示語の表す内容をまとめる」「段落の構成を把握する」問い合わせについて、その能力が十分身に付いているとは言えない結果がみられる。このことから、「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係を考え、文章を正しく読むこと」という指導内容の定着を図る必要がある。

指導に当たっては、段落の要点を抜き出したり、意味のまとまりごとに小見出しを付けたりするなど、内容を整理することが大切となる。その際、意味内容だけを追うのではなく、接続語、文末、繰り返し語句などの言葉も押さえておく必要がある。指示語や接続語は、文章の構成にかかわる語で、文章の論理的な関係を把握する上で大切な役割を果たしているので、その十分な定着を図りたい。

その際、以下にあげる言語事項とのつながりを重視することが必要である。

言語事項(1)

(オ)文及び文章の構成に関する事項

3学年 4学年(イ)「文章全体における段落の役割を理解すること」

(ウ)「文と文との意味のつながりを考えながら、指示語や接続語を使うこと」

(エ)表記に関する事項

3学年 4学年(イ)「句読点を適切に打ち、段落の始め、会話の部分などの必要な箇所は行を改めて書くこと」

工 ことば

「筆順を正しく理解する」「主語述語の関係を正しくとらえる」「送り仮名をつけて漢字で正しく書く」問い合わせについて、その定着が十分であるとは言えない。

筆順については、言語事項(2)の(ア)書写に関する事項のうち、1学年2学年(イ)「点画の長短、接し方や交わり方などに注意して、筆順に従って文字を正しく書くこと。」という指導内容との関連がある。筆順とは、書き進む際の合理的な順序が習慣化したものであり、漢字仮名交じりの日本語表記において、特に漢字の組立てなどでは点画の配置、分割が字形を整える上での重要な要素となる。漢字を有効に活用する上からも、点画数との関連を視点に加え、きめ細かな指導に当たりたい。

「主語と述語との関係」については、文の構成についての最も基礎となるものである。児童が複雑な構成の文を書くようになると、主述のねじれや脱落も多くなってくる。文としての意味が通じるためには、主語と述語とがきちんと照応することが大切であることを、第1学年及び第2学年の段階から十分指導しておくことが必要である。

指導に当たっては、主語と述語の関係がねじれたり、主語がはっきりしなかったりする文を取り上げ、それらが聞き手や読み手に意味が通じないことに気付くようにしていくことが大切である。その上で、次第に、主語が省かれている文や、やや複雑な文型についての主語と述語の関係の理解へと導いていくようにしたい。

「漢字を書く」については、画数の多い漢字や「収める」「納める」「修める」のうち、どれを使うかなど、漢字の意味を理解していなければ正しく書くことができない漢字についての定着が十分であるとは言えない。

漢字の指導に当たっては、漢字の成り立ちのおもしろさや、漢字で表記することの便利さなどが実感できるようにしたい。また、文や文章を書く際には、漢字のもつ意味を考えながら正しく使ったり、送り仮名については、語句の構成などとの学習と関連付けて指導する必要がある。

オ 作文

「文章を書く」力をみる問題では、自分の考えを明確に述べることができていないものや、表記上の誤りがあるもののが多かった。表記に関する誤りでは、誤字・脱字、句読点が的確にうたれていないもの、改行の際に段落がつけられていないものなど、言語事項に関する内容が十分身に付いていないと考えられる誤りが多かった。

「文章を書く」ことは、言語事項の指導事項の定着をみることができる学習でもある。よって、言語事項の指導の充実と文章を書く力とは、深く結び付くものであると言える。

2 実態調査の分析と考察

検証授業前に、国語に関する児童の実態を把握するために、実態調査を実施した。

(1) 調査のねらい

国語の学習への興味・関心など、国語に関する児童の実態を把握する。

(2) 調査方法

質問紙法による選択・記述法

(3) 調査対象

研究協力学校 第3学年37名

(4) 調査時期

平成16年5月下旬

(5) 調査結果と考察

ア 国語の学習で好きなこと

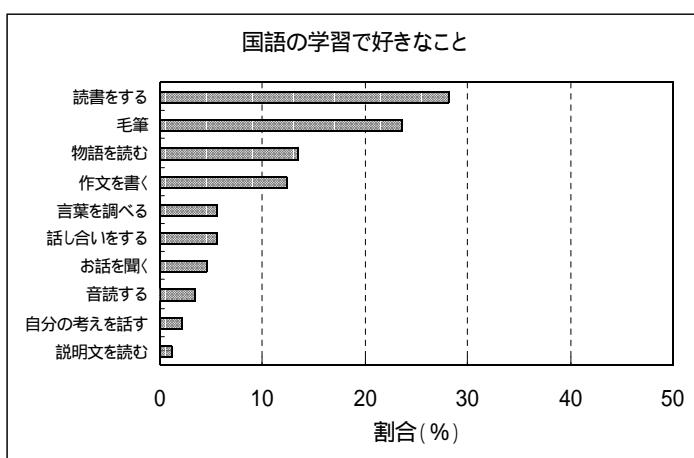


図2

物語に比べて説明文の学習は、楽しい学習であるとは言えないことを表している。

イ 国語の学習で自信があること

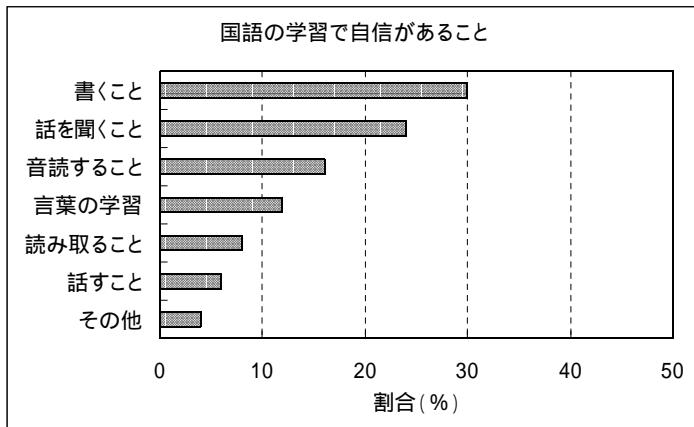


図3

ウ 本を読むこと

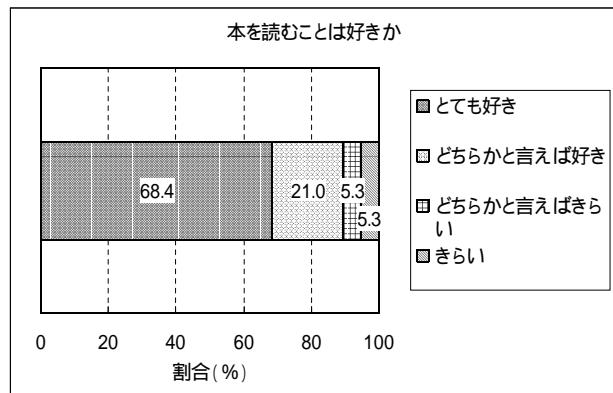


図4

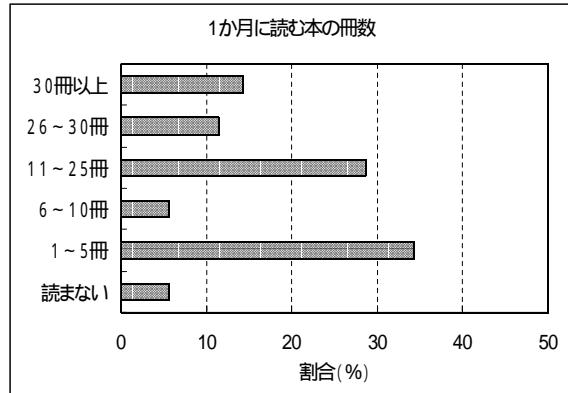


図5

本を読むことを好む児童が多く、「とても好き」「どちらかと言えば好き」を合わせると、90%程度になる。また、1か月に読む本の冊数を「11冊以上」と答えた児童が60%近くおり、本を読む習慣が身に付いている児童が多いと言える。

「読書をする」や「物語を読む」など、「読むこと」の学習を好んでいる傾向がある。

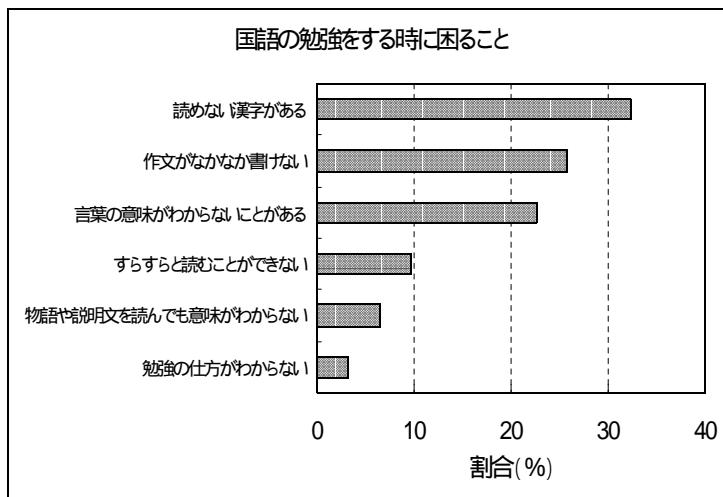
その一方で、「話し合いをする」や「自分の考えを話す」を好む割合は低く、自分の考えを発表し合う中で学ぶ楽しさを感じている児童は少ないと言える。

また、「言葉を調べる」や「説明文を読む」を好む割合も低い。このことは、言葉に対する関心は低い方であると言える。

30%程度の児童が「書くこと」に自信があると答えている。

「言葉の学習」や「読み取ること」「話すこと」については、自信があると答えた割合は低く、言葉の学習の進め方や読み取り方、話し方などの学習の方法が十分身に付いているとは言えない。

工 国語の勉強をする時に、困っていること



「読みない漢字がある」が約32%、「言葉の意味がわからないことがある」が約23%であり、言葉の意味や読み方など、言葉に関する学習にあまり自信がないという状況がうかがえる。また、「作文がなかなか書けない」と答えた割合は約25%と比較的多い。図3において、「書くこと」に自信があると答えた児童の割合も約30%と多かった。このことは「書くこと」については、自信がある児童とそうでない児童とに分かれていることを表していると考えられる。

漢字の読みや言葉の意味など、言葉の知識・理解は、「読み取ること」「話すこと」の基礎として必要な力であり、国語科学習を進める上で、重要な力である。国語科の学習を通して、言葉の知識・理解を伸ばす必要がある。

(6) 「主語述語」「接続語」「指示語」に関する調査の実施

「主語と述語の関係の把握」「接続語の役割を知ること」「指示語のさす内容の把握」についての理解度をみるための調査を、検証授業前に実施した。また、その調査と同じ問題について、検証授業後にも行い、授業前後の比較をみるようにした。(結果については、P17に掲載)

3 研究内容

ここでは、「言語事項の定着を目指した国語科学習指導の在り方」という研究主題のもと、第3学年「自然のかくし絵」における学習指導の工夫について提案することにする。また、言語能力を高める上で、基礎的・基本的な内容の中でも、国語科学習の基礎として位置付けられる「言語事項の確実な定着」を目指すことができるようとした。さらに、基礎学力調査の分析結果から、言語事項の中でも、「文及び文章の構成に関する指導事項」の定着に焦点を当て、研究を進めることにした。

(1) 教材研究

教材研究は、教材として取り上げられた文章や文学作品について、教育的な観点から、教材としてどのような特徴があるかを明らかにするものである。したがって、学習の目標や児童の学習能力、言語生活の実態などと関連させながら研究する必要がある。

説明文の教材研究の視点として、次の点があげられる。

- A 文章構成を明らかにする。
- B 文と文との関係を明らかにする。
- C 接続語の役割に注目する。
- D 指示語の指し示している範囲に注目する。
- E 文末表現から筆者の意図をつかむ。
- F 重要語句に注目する。
- G 絵、図表、写真、グラフに注目する。

ア 教材の構成図

要旨，文章構成，重要なことば，指導の視点などを示した教材の構成図の例を表1に示す。

表1 教材の構成図（3年 自然のかくし絵：東京書籍）

表 1 中の 内の数字は、形式段落を表す。

イ 重要なことばの働きに視点を当てた構成図

言語事項の指導内容の確実な定着を図るために、まず、教師自身が教材文の中のことばに関する特徴を押さえておくことが必要である。

重要なことばの働きに視点を当てた教材の構成図を表2に示す。

表2 ことばの働きに視点を当てた教材の構成図（3年 自然のかくし絵：東京書籍）

			書き手の論理展開	ことば			
				重要語句	指示語・接続語	文末表現	主語・述語
説 論	ほ ご 色	① ↓ ②	セミやバッタを、ふと見失うことがあります。 身をかくすのに役立つ色のことをほご色といいます。	木のみき 虫のしげみ 一はず や 見分けにくい 身をかくす 役立つ ほご色	このように	あります います 役立ちます いいです	(私たちは)～ あります。 セミやバッタは～ います。 色は～役立ちます。
本 講	例	③	コノハチョウの羽は、表はあざやかなオレンジ色ですが、うらは、かれ葉ののような色をしています。	あざやかな かれ葉 ～のよう な とじる そっくり	それに ですかる	います です ません	羽は～です。 羽は～います。
ほ ご 色 の 説 明	④ ↓ ⑤	ほご色は、自然のかくし絵だということができるでしょう。 ですから、こん虫のほご色は、人間の目をだますのと同じくらいにこれらめでてきの目をだまして身をかくすのに役立っていると考えられます。	上手に 身をかくす たくさん かくし絵 だます	この ですから これら	います でしょう です ます	力は～同じくら いです。	
	例	⑥ ↓ ⑦	トノサマバッタは、自分の体の色がほご色になるような場所をえらんでるんでいるようです。 変わりの色が変化するにつれて、体の色がかわっていくこん虫もいます。	えらんで かっ色 重ねる ほとんど かれ草 ほとんど 変化 ～につれて だんだん	この	です います です います ます ます	よう虫は～育ち ます。
ほ ご 色 の 限 界	⑧ ↓ ⑨	じっとしているかぎり、ほご色は、身をかくすのに役立ちます。 ところが、こん虫が自分の体と同じような所にいたとしても、動いたときなどには、鳥やトカゲに食べられてしまうことがあります。	觀察 だけ 活動 じっと ～かぎり 身をかくす ～としても ちょっとした 風のがす するどい	ところが	います います ます あります です	こん虫は～いま す。 ほご色は～役立 ちます。	
ま と め	ほ ご 色 と こ ん 虫	⑩	ほご色は、どんな場合でも役立つとはかぎりませんが、てきにかこまれながらこん虫が生きつづけるのに、ずいぶん役立っているのです。	場合 かこむ ずいぶん		です	

表2中の 内の数字は,形式段落を表す。

(2) 学習指導過程の工夫

学習指導過程においては、次の観点から工夫することにした。

- ・ 言語事項の指導事項の定着を図るための学習指導過程の工夫
- ・ 個に応じた指導の充実を図るための工夫（指導と評価の一体化）

ア 言語事項の指導事項の定着を図るための学習指導過程の工夫

言語事項の指導事項の定着を図るための学習指導過程の工夫として、
学習指導過程に言語事項及び指導の手立ての欄を設定する。

語い力を高め言語感覚を豊かにするための語句等の指導法（音読・暗唱、視写、
抜き書き、言葉の比較等、言い換え、造語）を用いるようにする。

表3は、**□**を考慮して作成した学習指導過程の一例である。また、**□**は**○**を示したものであり、**□**は**○**を示したものである。

表3 学習指導過程例（3年 自然のかくし絵：東京書籍）

単元名		主とまわりごとに内容を考えながら～自然のかくし絵～	本時	3／15
本時の目標		○ ほご色についてまとめることができる。		
時間	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	言語事項及び指導の手立て	「伝え合う」ための言語意識
5	1 本時学習について話し合う。 ほご色とは何かをまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ほご色」という言葉の意味を、「かくし絵」という言葉の意味と関連付けて考えさせ、「ほご色」という言葉への関心をもたせるようにする。 ○ 自然のかくし絵じてんを作るためには、自然のかくし絵についての訊問文をしっかり読み取ることが必要であることを伝え、意欲付けをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 語句の意味 ・ 関連する言葉から考える 	目的意識： 対にちいて考えるのか、何のために調べるのか
10	2 学習の手順、方法について話し合う。 ○ 学習の範囲 ○ 学習の方法 ・音読 ・サイドライン ○ 学習の手順 ・一音音読→一人で読み→話し合（二人→全体）	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学習の範囲を視写（聴写）させながら、「ほご色」の意味を考えさせる。 ○ 「ほご色」とは何かについて説明する時に、大事だと思う言葉に線を引かせるようにする。 ○ 一人調べ読みに入る前に、音読語と説明語を確認し、指示語については、それが何を指しているのかについて考えさせるようにする。 ○ 一人調べ読みに入る前に、いくつかの文についての述語を押さえ、その主語は何かを考えさせるようにする。 ○ 学習の流れを知らせ、見通しをもって活動することができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 句読点の打ち方① ○ 教本で書かれた文章② ○ 姿勢③ ○ 語筆の持ち方④ ○ ①～④は 聴写（聴写）でチェック ○ 指示語や接続語の役割 ・一人調べでチェック ○ 主語述語の関係 ・一人調べでチェック 	方言意識 どのようにして調べるのか 相手意識 説明→確認と 二人で、二人で 一音員で、 評議会感 発達の段階や意見 (教材 文を考 したもの)
10	3 課題を解決するため に本文を読む。 ○ 一音音読 ○ 指名読み ○ 一人調べ読み	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一音音読では、文と文とのつながりがよく分かるよう、文と文との間を十分にとって読ませるようにする。 ○ 一人調べ読みでは、サイドラインは、大切だといつけるだけ短い言葉にしはって引かせるようにする。 ○ なかなか線を引くことができないでいる児童に対しては、きし絵なども参考にしながら考えさせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ ほっさりした発音 ・声の大きさ、口の開け方の確認 	
15	4 調べたことをもとに話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ○ まず、二人組で、お互いの考えを述べ合わせるようにし、主体的に活動するための場を設定する。 ○ 自分の考えをどのよう述べたらよいのかについて、具体的に指導し、児童が活動しやすいように配慮する。 ○ 言葉一つ一つに着目させながら、言葉から想像力をかに読み取ることができるようにする。 ○ 話し合いの申で、指示語がさ内容や接続語の役割について押さえようとする。 ○ 述語を示した文の主語について確認し、主語と述語の関係について理解させるようする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 指示語や接続語の役割 ・指示語の役割を示したカード ・接続語の種類をまとめたカード ○ 主語述語の関係 ・主語述語の関係を示した図 	相手意識 反復→ 目的意識 ほご色の意味を とめる 接続語 （二人で、全員で）話し合い 方言意識 線を引いたこと を発表する なぜそう思うのかを発表する 評議会感 友達の意見や感 応、先生のこと
5	5 本時の学習を振り返り、まとめる。 ○ 課題についてまとめる。 ○ 次時の学習について聞く。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「ほご色」について教師といっしょにノートにまとめさせ、文のまとめ方を学ぶことができるようにする。 ○ 指示語や接続語など、重要なことはについては、再度取り上げて確認する。 ○ 次時の学習内容について簡単に知らせ、章節の総括を図る。 		

イ 個に応じた指導の充実を図るための手立ての工夫

個に応じた指導の充実を図るために、一人調べ学習の時間を通して、自分の読みの程度を知らせ、自己評価、自己実現の場を設定するようにしたい。一人調べ学習の時間に自分なりの読みをすることで、後の話し合いやまとめの中で、友達の意見や教師の話と比べながら、自己評価をすることがされることになる。また、教師は、一人調べ学習の時間に各自の学習の様子を観察することによって、個に応じた助言をすることができるとともに、児童一人一人の理解状況や能力などを知ることができる。さらに、グループや全体の話し合いの場で、よい考えをもっているにもかかわらず、自分の考えを発表できていない児童の考えを取り上げ、認める場をもつことにより、自信をもたせるようになるなどの配慮が必要である。

(ア) 一人調べ学習の在り方

一人調べ学習の時間に主体的な読みを進めるためには、児童が学習の仕方を知っておくことが必要になる。そこで、3 研究内容（1）教材研究 の視点 A～G を基に、児童向けの一人調べのための手引きを作成する。その手引きを基に一人調べ学習を行うことを通じて、主体的な学習へ導くとともに、学習方法を定着させるようにしたい。

一人調べ学習のための手引きの例を表4に示す。手引きについては、各学校、各学級の実態に応じて、作成する必要がある。

表4 一人調べ学習のための手引き

(3) 基礎的・基本的な内容の定着を図るための具体的手立て

ア 繰り返し学習を通して、言語事項に関する能力を高めるための手立て

言語事項に関する能力を高めるためには、言語事項に関する問題プリントを用意し、朝自習などの日常の教育活動の中や家庭学習で、繰り返し学習を行い、授業以外で復習・ドリルの時間を設けることが必要である。

繰り返し学習用の学習プリントの一例を図7に示す。

○ 「はなぶるへんじやう」 「はなぶるへんじやう」 「はなぶるへんじやう」 「はなぶるへんじやう」

一 赤ちゃんが (はなぶるへんじやう)

二 (はなぶるへんじやう) はなぶるへんじやう

三 赤ちゃんが (はなぶるへんじやう)

四 空が (はなぶるへんじやう)

図7 繰り返し学習のためのワークシート(一例)

4 実践研究

(1) 検証授業

ア 授業の視点

一人調べ学習や話し合いの時間に、「主語と述語の関係の把握」「接続語の役割」「指示語の役割」について考えさせることにより、言語事項に関する学習内容の定着を目指した「ことば」に着目した読みの学習の展開の在り方について検証する。

イ 学習指導の実際

(ア) 単元名

まとまりごとに内ようをとらえながら(教材名「自然のかくし絵」)

<小学校第3学年 東京書籍上>

(イ) 本時の目標

ほご色が役立つ場合と役立たない場合についてまとめることができる。

(ウ) 本時の学習指導過程 (□は、言語事項の指導事項の定着を図るための工夫点である。)

時間	学習内容及び学習活動	指導上の留意点	言語事項及び指導の手立て	「伝え合う」ための言語意識	準備物
5	1 本時学習について話し合う。 ほご色は、どんな時に役立つのだろうか。また、どんな時には役立たないのだろうか。	コノハチョウ、トノサマバッタ、ゴマダラチョウの身のかくし方について振り返り、ほご色の役割を確かめる。ほご色は、虫がどんなことをしている時でも役立つのだろうかと疑問を投げかけ、本時学習のめあてを押さえるようにする。	語句の意味 ・関連する言葉から考える	目的意識 何について考えるのか、何のために調べるのか	
10	2 学習の手順・方法について話し合う。 学習の範囲 学習の方法 ・音読 ・サイドライン 学習の手順 ・一斉音読 一人調べ読み 話し合い (二人 全体)	学習の範囲を聴写させながら、「ほご色」が役立つ場合と役立たない場合を考えさせる。 「ほご色」が役立つ場合と役立たない場合とはどんな時かについて説明する時に、大事だと思う言葉に線を引かせるようする。 線を引いた箇所をもとに、「ほご色」が役立つ場合と役立たない場合について、自分なりに文章化させるようする。 一人調べ読みに入る前に、指示語と接続語を確認し、指示語については、それが何を指しているのかについて考えさせるようする。 一人調べ読みに入る前に、いくつかの文についての述語を押さえ、その主語は何かを考えせるようする。 学習の流れを知らせ、見通しをもつて活動することができるようする。	句読点の打ち方 ・聴写 敬体で書かれた文章 ・聴写 姿勢 ・聴写 鉛筆の持ち方 ・聴写 指示語や接続語の役割 ・一人調べでチェック 主語述語の関係 ・一人調べでチェック	方法意識 どのようにして調べるのか 相手意識 友達に、友達と 場面意識 一人で 二人で 全員で 評価意識 友達の反応や意見	(教材文を写したもの) 一人調べのための学習の手引き
10	3 課題を解決するために本文を読む。 一斉音読 指名読み 一人調べ読み	一斉音読では、文と文とのつながりがよく分かるように、文と文との間を十分にとって読ませるようにする。 一人調べ読みでは、サイドラインは、大切だと思うできるだけ短い言葉にしほって引かせるようする。 なかなか線を引くことができないでいる児童に対しては、さし絵なども参考にしながら考えせるようする。	はっきりした発音 ・声の大きさ、口の開け方の確認		
15	4 調べたことをもとに話し合う。	まず、二人組で、お互いの考えを述べ合わせるようにし、主体的に活動するための場を設定する。 自分の考えをどのように述べたらよいのかについて、具体的に指導し、児童が活動しやすいように配慮する。 言葉一つ一つに着目させながら、言葉から想像豊かに読み取ることができるようにする。 話し合いの中で、指示語がさす内容や接続語の役割について押さえるようする。 述語を示した文の主語について確認し、主語と述語の関係について理解させるようする。	指示語や接続語の役割 ・指示語の役割を示したカード ・接続語の種類をまとめたカード 主語述語の関係 ・主語述語の関係を示した図	相手意識 友達 目的意識 ほご色は、どんな時に役立つののか、どんな時に役立たないのかをまとめる 場面意識 (二人で、全員で)話し合い 方法意識 線を引いたことを発表して、なぜ思うのかを発表して 評価意識	指示語、接続語の説明用カート
5	5 本時の学習を振り返り、まとめる。 課題についてまとめる。 次時の学習について聞く。	「ほご色」が役立つ場合と役立たない場合について教師といっしょにノートにまとめ、文のまとめ方を学ぶことができるようする。 指示語や接続語など、重要なことばについては、再度取り上げて確認する。 次時の学習内容について簡単に知らせ、意欲の継続を図る。			

ウ 授業の結果と考察

(ア) 授業の様子から

児童は、一人調べ学習の仕方や話し合いの仕方など、学習の進め方については、十分身に付いているとは言えなかったが、「ことば」に着目して読み取る姿勢を見せていました。授業の様子から、よい点として次の点があげられる。

課題を確認する際に、「また」という接続語の役割について押さえることができた。

一人調べ学習で「ことば」に着目させた読みを行わせることができた。「ことば」のもつ意味を、文や文章の中で確認させることを繰り返すことによって、「ことば」がもつ意味の役割や重要性に気付くことができる。

グループでの話し合いの時に、「どのことば?」という具合に、児童が「ことば」に着目していると考えられる発言があった。

児童の発表の中で、「『じっとしている』の『じっと』というところに線を引きました。」という「ことば」の意味がもつ働きに着目した発言があった。

「ところが」という接続語が、反対の意味の文をつなぐという役割があることを押さえることができた。



一人調べの時間



グループでの話し合い

課題としては、次の点があげられる。

「ことば」の意味がもつ働きに着目した発言があった際、なぜそこが大切だと思ったのか、そのことばを使って自分でどのようにまとめたのかまで言わせる必要がある。

「ところが」という接続語の役割を押さえる時に、「じっと」と「動く」というキーワードに着目させることで、「ところが」をはさんで、その前後の文の意味が反対であることを気付かせる必要がある。そのことを通して、「じっと」と「動く」ということばの意味についても押さえることができる。

グループの話し合いの時に、「ことば」について確認する時間が設定できるまで、話し合いの仕方を身に付けさせる必要がある。

課題についてまとめた後で、「接続語の役割」等の「ことばの意味や役割」について押さえる方が、児童の思考の流れがとぎれないと考えられる。

「ほご色は～役立ちます」という文において、主語述語の関係を押さえる必要がある。

「この」という指示語が何を指しているのかを押さえる必要がある。

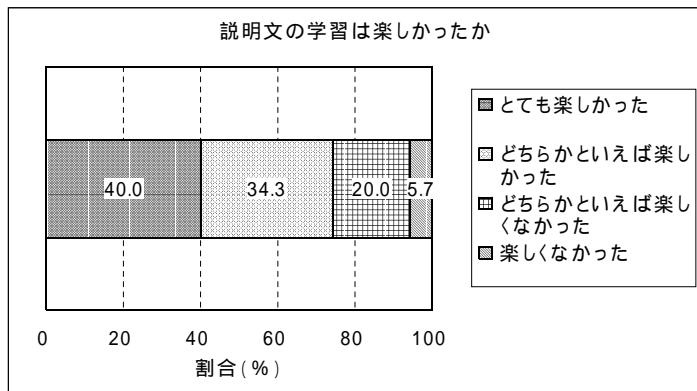
2つの中心となる文を押さえることができたのはよいが、それ以外の文をどのように関係付けて押さえていくかが課題である。

本時に押さえた「ことば」について記したカードを提示するなど、「ことば」の意味や役割を意識付けるための手立てが必要である。

(1) アンケート調査結果から

検証授業後、授業に関して、アンケート調査を行った。

a 説明文の学習の楽しさ



「とても楽しかった」「どちらかといえば楽しかった」と回答した割合は、合わせて約75%であった。

説明文の学習については、事前アンケートにおいて「自信がない」と回答した児童が多かったが、一人調べ学習や話し合い学習などの学習の進め方を身に付けることで、楽しく学習することができたと考えられる。

図 8

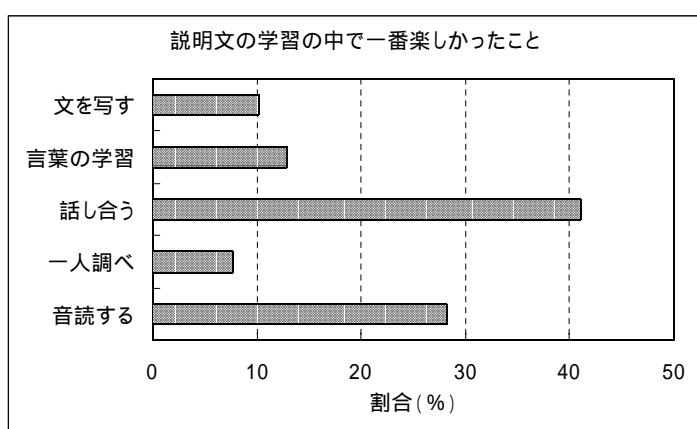
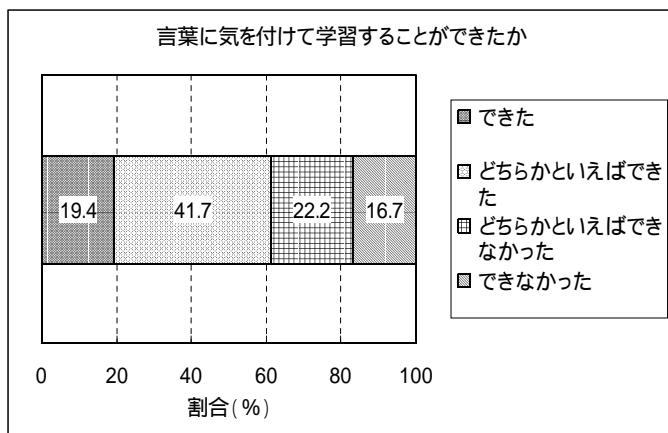


図 9

れる。3年生の実態に応じた一人学習の進め方について工夫改善する必要がある。

b 言葉の学習について



説明文を学習する中で、「言葉に気を付けて学習することができたか」という問いに、「できた」「どちらかといえばできた」と回答した割合を合わせると、約60%であった。

半数程度の児童は、言葉の役割について意識することができている。しかし、説明文の内容をとらえる授業において、言葉の意味や役割を意識させるとともに、言葉の意味や役割をつかませながら学習を進めることは難しいということができる。

図 10

c 「主語述語」「つなぎことば」「こそあどことば」の中で一番難しいと思うもの

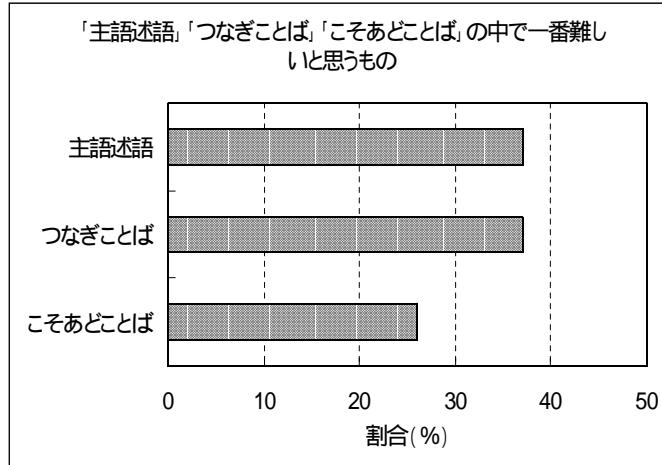


図 1 1

今回の実践で、重点指導事項として「主語と述語の関係の把握」「接続語の役割を知ること」「指示語のさす内容の把握」があった。その中で、「一番難しいと思うものは何か」という設問に対して、「主語と述語の関係の把握」「接続語の役割を知ること」が約40%弱、「指示語のさす内容の把握」が約25%であった。

このことは、検証授業前に実施した「指示語のさす内容の把握」の問題において正答率が低かったことや、検証授業後の調査で「指示語のさす内容の把握」をみる問題の正答率が、「主語と述語の関係の把握」「接続語の役割を知ること」をみる問題の正答率に比べて低くなっていることと矛盾しているように見える(図12参照)。これは、今回の実践では、指示語の役割について取り上げて指導することが多かったことから、児童に指示語の役割を十分意識付けることができ、「指示語の役割」について自信を付けた児童が増えたことによるものと考えられる。

アンケート結果では、「主語と述語の関係の把握」を「主語述語」、「接続語の役割を知ること」を「つなぎことば」、「指示語のさす内容の把握」を「こそあどことば」と表している。以下同様である。

(ウ) 成果と課題

検証授業前と直後(7月上旬)に、「主語と述語の関係の把握」「接続語の役割を知ること」「指示語のさす内容の把握」について、同一問題で調査した結果、図12のような結果となった。

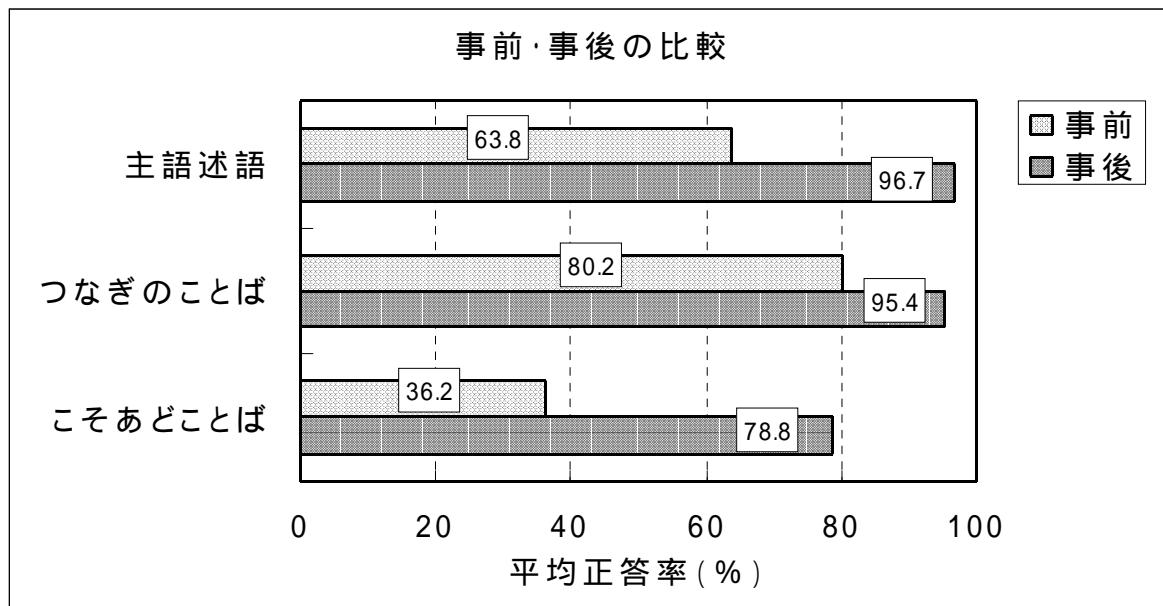


図 1 2

いずれも、平均正答率は上昇している。特に、「指示語のさす内容をとらえる」問題では、授業前に比べると40ポイント以上伸びている。また、「主語と述語の関係を押さえる」問題と「接続語の役割を押さえる」問題では、100%に近い正答率を出している。

このことは、「ことば」への意識が高まり、それについて少しづつ理解を深めている結果であり、授業の中で、「主語と述語の関係」「接続語」「指示語」を意識させることは、理解を深めることにつながることを表している。

(2) 基礎的・基本的な内容の定着を図るための繰り返し学習の実際

ア 繰り返し学習の進め方

学習指導要領の国語科「言語事項」の定着を図るために、繰り返し学習が必要である。

そこで、本研究において重点指導事項としている「主語と述語の関係の把握」「接続語の役割を知ること」「指示語のさす内容の把握」についての練習問題を作成し、取り組ませることにした。朝自習や家庭学習など、学級の実態に応じて取り組んでもらうようにした。

練習問題は、それぞれ6枚ずつ計18枚用意し、本単元に取り組んでいる6月中旬から、夏休みに入る前までの期間に取り組んでもらった。

イ 考察

練習問題に取り組んだ後に、「主語と述語」「接続語」「指示語」について、確かめテストを実施した。確かめテストは、それぞれ2回ずつ実施した。その平均正答率を算出すると、図13のような結果になった。

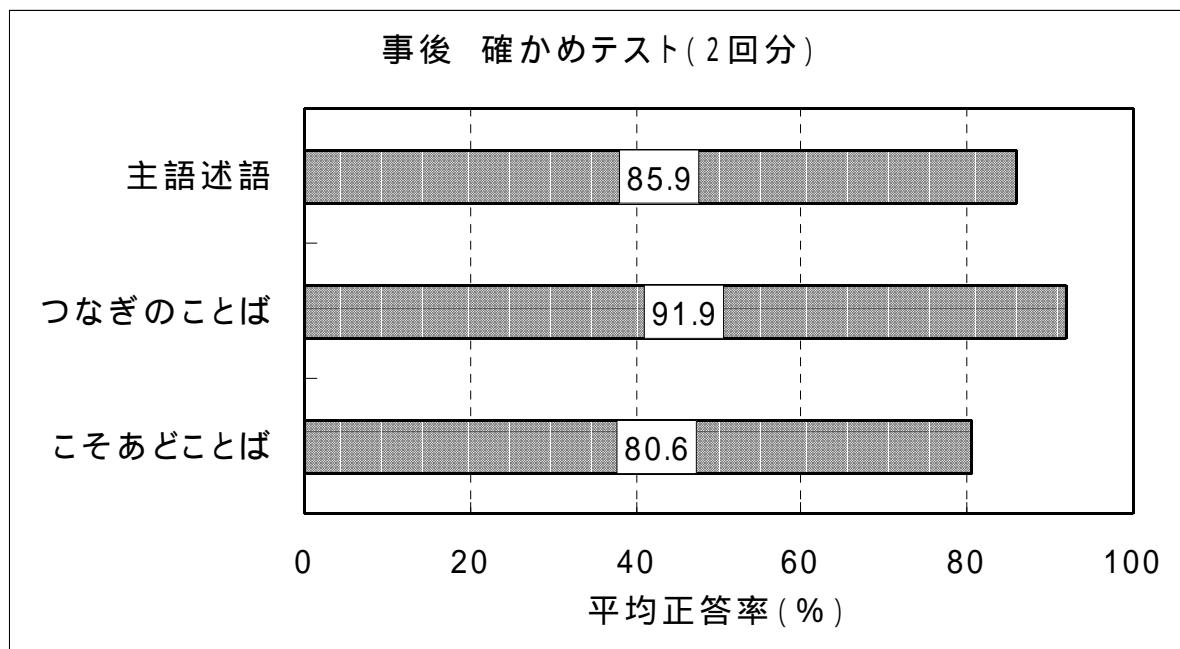


図13

いずれも80%以上の正答率を示している。「接続語」については、91.9%とかなり高い正答率である。また、「指示語」についても、他の二つに比べると低いが、検証授業前に実施した調査における正答率36.2%に比べるとかなり伸びていることが分かる。

このことは、練習問題を用いた繰り返し学習により、理解が深まってきていることを表しており、繰り返し学習の効果を意味している。

研究の成果と課題

1 研究の成果

基礎的な言語に関する能力を育成するには、毎時間の授業における「言葉の役割」を意識した指導に加えて、練習問題等による繰り返し学習に取り組むことが効果的であると言える。ここでは、研究内容2「学習指導過程の工夫」と研究内容3「基礎的・基本的な内容の定着を図るための工夫」についての成果をあげることにする。

(1) 学習指導過程の工夫

学習指導過程の中に、言語事項の指導事項を設け、本時で考えられる言語事項の指導事項を記すようにすることで、言語事項との関連を図る指導を行うことができるとともに、言葉の意味や役割について児童に意識付けを図ることができた。

一人調べの時間を設定し、調べたことを基に話し合う中で考えさせるようにすることで、話し合いの仕方を学ばせることができ、話し合うことの楽しさを感じさせることができた。

(2) 基礎的・基本的な内容の定着を図るための工夫

授業において、その単元で重点的に指導する「重点指導事項」を「言語事項」との関連で設定し、言葉の意味や役割に関する指導の重点化を図ることで、言語事項の内容について、計画的、段階的に指導することができた。

授業において、その単元で重点的に指導する「重点指導事項」を決めて、言葉の意味や役割について意識付けを図るとともに、その練習問題に取り組ませることで、理解が深まり定着を図ることができた。

2 課題

本研究では、児童が主体的に取り組む中で基礎的な言語に関する能力を育成するために、一人調べ学習や話し合いの時間を設定し、楽しく学ぶ中で児童自身が十分思考することができるように配慮した。しかし、一人調べの仕方や話し合いの仕方など、小学校第3学年の6月という時期の児童にとっては、多くの学習方法を一度に身に付けなければならない状況になり、理解するための十分な時間を確保することが難しかった。そこで、次のような課題があげられる。

(1) 学習指導過程の工夫

主体的に学習する中で、基礎となる言語に関する能力を育成するために、一人調べや話し合いの時間を設定したが、どのように調べたらよいか、どのように話し合ったらよいか、その方法を十分身に付けさせることができなかつた。一人調べの内容をしぼりこみ、話し合う内容を焦点化するなど、3年生の6月という児童の実態にあった学習の仕方を考えて指導する必要がある。

説明文の内容の読み取りと言葉の意味や役割を考えることとをうまく結び付けて指導することが難しい。言葉の意味や役割について考えさせる場合には、どの言葉の役割について指導するのか、指導する内容を焦点化する必要がある。

(2) 基礎的・基本的な内容の定着を図るための工夫

どの学年のどの単元で、どの「言語事項」について重点的に指導するのか、「言語事項」の指導事項について、指導の重点化を図るために年間指導計画を作成する必要がある。

- 参考文献 -

- | | | |
|----------|--------------------------------------|---------|
| 文部省 | 平成11年「小学校学習指導要領解説 - 国語編 - 」 | 東洋館出版 |
| 文部省 | 昭和36年「読むことの学習指導」 | 光風出版 |
| 尾方 篤 編 | 平成15年 教職研修特集「国語力」の向上をどう図っていくか | 教育開発研究所 |
| 那霸市教育研究所 | 平成4年 紀要254号「平成3年度基礎学力向上方策研究委員会研究報告書」 | |